パソコンの「裏」にみるもの

多くのオフィスワーカがそうであるように、今の私の仕事にパソコンは切っても切り離せないものである。厳密にはオフィスにいることが少なく、工場をめぐり巡って口八丁・手八丁で仕事しているため、出張先・車内・休日問わず四六時中、ノートサイズのモバイルパソコンがくっついてくる。忌々しいパソコンめ、と蹴っ飛ばしたくなるが、蹴飛ばして中の大切で膨大な情報資産がクラッシュしようものなら目もあてられず、ますます苛立ちがつのるという悪循環。今回はこのパソコンというものの「裏」にみえるものを高飛車に独断して溜飲を下げればと、思う。

１．パソコンの裏に見る日本の危うさ

パソコンは、組合せ型モノづくりの最たるものという定評がある。注文メニューに応じて、ハードウェアは各種パーツメーカの部品を組合せ、マイクロソフト提供のＯＳと便利ソフトを乗っけて、はい出来上がり。これをＣＴＯビジネスともいうが、コスト勝負に陥っているパソコンモノづくりに、日本企業が決定的なアドバンテージを握るものは既にない。こういうタイプの市場は製品・技術以上にビジネスモデルの優劣が雌雄を決するが、日本はこの世界での独創的な着想力が伝統的に弱い。日本は「技術立国」で「擦り合わせ型モノづくり」だと自己弁護する向きがあるが、それだけでは単なるキーパーツ供給国、ニッチな市場のリーダでしかなくなる。ここからの脱皮は次の２点とみる。ひとつは、近未来を洞察し新市場創出する「ビジネスモデルまずありき」として、商品・技術はそれの実現のためのテンポラリな要素にすぎないという発想のビジネス文化の定着である。そこで選ばれる商品・技術側にのみ、身をおくビジネスでは日本はもたない。もうひとつは、さりども「技術」。標準化された技術はコスト競争に入るため、そこは知的財産化して各国に技術輸出してロイヤリティで稼ぎながら、次のビジネスモデル開発とリンクした他の追随許さぬ技術を独創・設計していくという技術循環である。このとき、獲得した技術の国際標準化イニシアチブを併せて握らないと知財ビジネスも覚束ない。まさに「技術立国」というより、その中核の「設計立国」を目指すものである。そんなこと、エライ経営トップはわかっているはずだが、目先のモノ「作り」投資ばかりで、モノ「創り」の設計投資を売上高比率でしか判断しないというトップの戦略欠如が国を危うくする。

２．パソコンの裏にみるネットワークの闇

パソコンを使っているとはいうものの、実はその裏に張り巡らされたインタネット・イントラネットを利用しているというのが実態である。光速でのコミュニケーション・情報取得がビジネスのスピードを加速し、個人の生活の彩りを豊かにする。とはいうものの、インタネットを介した膨大な情報へのアクセスと通信は、反面、自らの価値ある情報の流出リスクを伴っている。ビジネスのみならず個人情報も然りであり、個人生活でのネットの闇は犯罪温床の感さえある。それはさておき、中国の世界工場化や新製品の世界同時立上げに代表するグローバルなモノづくりに、国内開発拠点から海外生産拠点への製品・技術情報の配信は、ネットワーク配信に頼らざるを得ないスピードが求められる。しかし、通信路上や海外拠点での機密情報漏洩リスクは深刻で、暗号化や権限制御の厳密化が追求されセキュリティコストは鰻上りとなる。これは鼬ゴッコであり、情報は結局、ネットの闇に吸い込まれる。ここは、いくら金かけても、「情報は漏れる」という開き直りの前提に立つべきであろう。そして情報は漏れても、顧客信頼の視点でマネのできない本物の技術で堂々勝負すべきである。日本の技術というのは日本人の資質と日本の価値観・責任感・美徳に成り立つものであり、たとえ表面的に模倣されても製品信頼までは揺るがない製品・技術開発を意識しつづけたい。つまりセキュリティに過剰にコストをかけるくらいなら「マネできるもんやったらヤッテミィ」と言える設計に金をかけないと国を危うくする。

まだまだ論及すればきりがないが、左程にパソコンは身近である。これに使われるのではなく我が物にしたい。残念ながら九州ＥＡＣが昨年末、閉会宣言したが、設計管理研究会活動に、もっと広域ネットを活用し「地域」に依存しない活動という観点を持込み、九州復活・全国活性化を提案していきたいと考えている。　以上